

今回は、茅ヶ崎ゆかりの芥川賞作家・開高健の紹介をしたので、今回は直木賞作家・城山三郎のことを話しましょう。

彼は経済小説という特異なジャンルで『総会屋錦城』『価格破壊』『官僚たちの夏』など『辛酸』『落日燃ゆ』『鼠』。反戦小説では、『一步の距離』『指揮官たちの特攻』など色々なジャンルで多くの作品を残しました。

われわれにとつては、もっと身近な作品もあります。愛妻を亡くした悲しみを綴った『そうか、もう君はいないのか』。茅ヶ崎の風物詩ともいべきエッセイ『湘南―海光る窓』などです。

南口駅前のマンションに執筆室を持ち、自宅も東海岸北にありましたから、駅前商店街や高砂緑地をヒョウヒョウと闊歩していた姿を見かけた人も多かったことでしょう。

その作風からは、硬派の代表のように思われがちですが、根っここの部分では、常に戦争と対峙し、正義を求め、妻を愛し続けた心優しい作家でした。



らifu萩園に通う三浦キヨさん92歳



ネクタイをリサイクルしたオリジナルポーチを作成しました



ご家族とバザーに来てくださいました もちろん三浦さんのポーチは完売です

日本中の人が自分の事として心を痛め、できる事を何かせずにはいられなかったと思います。私たちも同じで、家族や親戚、友人が被災したスタッフもいて、バザーで被災者を支援しようという決まりました。地域の皆さんも私たちが企画したバザーにいち早く協力してくださいました。

回覧板やお知らせを配布するとバザーの品物は瞬く間にあつまり、バザー当日、沢山の方が足を運んでくださいました。また、らifu萩園では、福島県生まれの三浦キヨさん(92歳)が自宅でコッソリ手芸品を作成して、当日もご家族と一緒に参加してくれました。

今回のバザーでは地域の皆さまと顔の見える繋がりができ、ご近所の老人会の方たちと交流するきっかけにもなりました。

東日本大震災により被災された皆さまに、心からお見舞い申し上げます。

今被災地では、震災を生き延びた人たちの「震災関連死」が増えています。もともと高齢化の進む地域であり、長期化する避難所・仮設住宅の生活は厳しい環境を強いており見過ごせない状況です。

全国各地で復興支援の輪が広がっていますが、私たちも継続的な支援ができればと考えます。

被災地はまだまだ厳しい生活を強いられ、復興まで長い道のりが予想されます。私たちも災害に備えながら、秋にまたバザーを開いて被災地への支援を続けたいと思います。今後ともよろしく願います。



被災地(名取市)の写真展示で被害状況を報告しました(現地に駆け付けた社員撮影)

東日本大震災応援“らifuバザー”のご報告



リフシアでは、去る4月24日(らifu萩園に於いて)、29日(らifu神明に於いて)東日本大震災応援バザーを行いました。ご協力いただきました地域の皆さま、とりわけ自治会や民生委員の皆さま、学生ボランティアの皆さま、関係機関の皆さまに心より感謝を申し上げます。バザーの収益と寄付金は総額で60万円になり、5月5日仙台市で被災地の介護や医療を支援する“東関東大震災・共同ネットワーク事務局”に手渡しで寄付いたしました。

編集後記

東日本大震災・福島原発事故の影響が私たちの生活すべてに大きな影響を与えています。広島・長崎の原爆投下、沖縄戦を経験した日本人はどのように戦後この国を復興したのだろう、この夏はコラムで紹介された茅ヶ崎ゆかりの“城山三郎”を読んでみようと思います。コラムにピッタリな挿絵“湘南の海”は以前らifu萩園に通っておられた加藤芳明さんの作品です。

今年3月大震災の影響で延期となっていた“ターミナルケア”についての介護セ

ミナーを来年3月23日(金)開催することにしました。講師の鳥海先生に相談しながら準備を進めています。次号(ぷち秋)で詳細をお知らせしますので宜しくお願いします。

皆さまの投稿やご感想をお待ちしています。



らifu柳島で最近流行っている露天風呂ならぬ露天足浴。お庭を眺めながらポットとできて気持ちいいですよ。



湘南つれづれ 直木賞作家・城山三郎

前回は、茅ヶ崎ゆかりの芥川賞作家・開高健の紹介をしたので、今回は直木賞作家・城山三郎のことを話しましょう。

彼は経済小説という特異なジャンルで『総会屋錦城』『価格破壊』『官僚たちの夏』など『辛酸』『落日燃ゆ』『鼠』。反戦小説では、『一步の距離』『指揮官たちの特攻』など色々なジャンルで多くの作品を残しました。

われわれにとつては、もっと身近な作品もあります。愛妻を亡くした悲しみを綴った『そうか、もう君はいないのか』。茅ヶ崎の風物詩ともいべきエッセイ『湘南―海光る窓』などです。

南口駅前のマンションに執筆室を持ち、自宅も東海岸北にありましたから、駅前商店街や高砂緑地をヒョウヒョウと闊歩していた姿を見かけた人も多かったことでしょう。

その作風からは、硬派の代表のように思われがちですが、根っここの部分では、常に戦争と対峙し、正義を求め、妻を愛し続けた心優しい作家でした。



今は、記念館こそありませんが、「城山三郎湘南の会」というサークルがあり、この会では、図書館での先に挙げた本を輪読する読書会をメインに、ゆかりの地を訪れる文学歴史散歩もあります。今年の七月には、「今、城山三郎を読むということ」という記念講演会があります。

茅ヶ崎市長編集の「ヒストリアちがさき」第3号に、「父・城山三郎と茅ヶ崎」という、娘さんの井上紀子さんが書かれた文が載っております。

彼が昭和三十年代初めから半世紀以上の長きにわたって、ここ茅ヶ崎で暮らしたことは、われわれ市民の誇りでもあります。

湘南の海と書籍を愛した、城山三郎が没して、もう四年になります。(井)

【特集記事】

認知症ケアの取り組みから

日本では85歳以上の4人に1人が認知症を発症していると言われていますが、まだまだ認知症ケアの取り組みは広く知られていません。今号特集記事は「認知症ケアについて」各現場スタッフからお話を伺いました。もし『あなたが、家族が、認知症と診断』され、これからの生活に不安を感じたら、一人で悩まないで思い切って相談に来てください。

らいつ松林 小規模多機能型居宅介護



天野さん

認知症の人は、ちょっとしたきっかけで混乱しやすいため一人暮らしが難しいケースがあります。「らいつ松林」も数名いらつしゃいますが、その日その時の様子で「らいつ松林」に来ていただけない時があり、困ったなど思ったりします。でも出かけたくない理由が認知症の人にもあり、



こちらのペースで無理強いできません。小規模多機能の利点を生かしてそのような時、自宅でご飯を作るお手伝いや暇を見て顔を出すなど訪



間に切り替えるようにしています。その人の気持ちやペースを大切にしながら添う事が認知症ケアには大切だからです。地域の中でしっかりと見守れば、慣れ親しんだ自宅の生活を最期まで続けられるのかもしれない。 (らいつ松林 天野)



光

らいつ神明グループホーム増設

らいつ神明では7月6日、グループホーム増築に向けた地鎮祭がありました。天候にも恵まれ、お客様にも参加頂き、神様に工事の無事と安全、今後のらいつ神明の繁栄をお祈り致しました。来年2月頃まで建設工事がありますが、完成しましたら“ぶちらいふ”で紹介し、内覧会等ご案内させていただきます。



地主さんや関係者の皆さんと記念撮影



ただいまお昼寝中→



らいつ神明のグループホームの皆さんも代表して参加

らいつ香川 グループホーム



福岡さん

4月オープンしたばかりの「らいつ香川」は認知症の方が共同で生活しています。自宅から住居を移した事で最初は混乱し『帰りたい』という人もいて、そんな時には近所を歩いたり香川駅の時刻表を見に行ったり、気持ちを否定しない係わりを心がけています。



梅ジュースとらっきょうも漬けています。



ある時、『帰りたい』と言って外へ歩きだした方が『梅干しを自分で作っていた』と話したのがきっかけで、昔利用したというお店に一緒に出かけ、梅を漬けてもらう事にしました。その日を境に穏やかな表情が増えたので、私たちは話し合い、積極的に食事作りやお掃除などお願いするようにしました。今は役割を持って生活されています。ご家族の顔もわからない時がありますが



「らいつ香川」のこまごました事は私たちがよくご存知です。本人に寄り添い、その思いに向き合う事が本当に大事だと思います。(らいつ香川 福岡)



里山公園にお弁当を作ってピクニック。

らいつ萩園 認知症デイサービス



櫻井さん

「らいつ萩園」の認知症デイサービスは地域に積極的に出かけています。ショッピングモール、海辺のファミレス、回転寿司などに行き、自分で清算してもらうなど現役時代の生活に近づけると、施設ではない生き生きとした表情が見られます。認知症の方はコミュニケーションの取り方が難しいので、入浴や排せつ、食事介助など



笑顔が自然とこぼれます



→マーケットで品定めも楽しみの一つ

↓近所のコンビニエンスストアで清算中です



普段の生活支援はもちろん、言葉はなくとも感性に直接働き掛ける様々な取り組みも大切だと思います。それから、認知症の人は体験したことをすっかり忘れてしまいうるので、こちらの様子が家族に伝わらず不安に感じている方が多いので、こまめに写真で報告しています。家族介護を支えるのも認知症ケアの重要な仕事です。

(らいつ萩園 櫻井)

